

道徳の教科化に賛成する学校教員は権威主義的伝統主義者か？

Do Authoritarian-Conservatives Approve Upgrading Moral Education to an Official School Subject?

目久田純一 1) 越中康治 2)

MEKUTA Jun-ichi ETCHU Koji

要 旨

本研究の目的は、権威主義的伝統主義と道徳の教科化に対する態度の関係性が、道徳教育均質化志向を媒介因子として仮定することによって、より良く説明されることを示すことだった。教育学部生と小・中学校教員を対象に質問紙調査を行い、権威主義的伝統主義尺度、道徳教育均質化志向尺度、そして道徳の教科化に対する態度について尋ねた。152名の教育学部生（男性72名、女性80名）と157名の小・中学校教員（男性69名、女性84名、不明4名）のデータに基づき、HAD16.050を用いて、権威主義的伝統主義と道徳の教科化に対する態度の関連性における道徳教育均質化志向の間接効果をBootstrap法によって検討した。その結果、教育学部生と小・中学校教員の双方において、許容範囲内の間接効果が認められ（それぞれ $Z=3.48$, 95% IC [0.07, 0.21]; $Z=1.39$, 95% IC [0.00, 0.06]）、本研究の想定した媒介モデルの妥当性が示された。

Abstract

The aim of this study was to show that making an assumption of a mediator variable, *an orientation for the homogenized moral education*, would explain better to relationship between attitude toward moral education upgraded to an official school subject and authoritative-conservation. We conducted a questionnaire survey and obtained valid responses from 152 undergraduates (72 males and 80 females) whose major were school education and 157 teachers (69 males, 84 females, and 4 unknown) working in elementary or junior high school. Mediation analysis using HAD (16.050ver.) yielded enough indirect effects ($Z=3.48$, 95%IC [0.07, 0.21] among teachers and $Z=1.39$, 95%IC [0.00 0.06] among students) and revealed validity of the mediational model as we expected.

キーワード：特別の教科「道徳」、権威主義的伝統主義、道徳教育均質化志向、学校教員

Key words : Moral education as a special subject, Authoritarian-conservatism, An orientation for the homogenized moral education, School teachers.

1) 梅花女子大学心理こども学部こども学科, 2) 宮城教育大学教育学部学校教育講座

1) Faculty of Psychology and Children's Studies, Baika Women's University, 2) Faculty of Education, Miyagi University of Education

問題と目的

2018年度から小学校において特別の教科「道徳」が開始され、2019年度からは中学校においても開始される。特別の教科「道徳」は、感じる授業から考える授業への転換を大きな特徴としており（林，2015）、深刻ないじめの実態、子どもの生活・地域・家庭のあり方の変化、低い自己肯定感と社会参画意識、そして正解のない社会状況に対応する資質能力の必要性といった、さまざまな社会的要請に応えることを意図している（文部科学省，2016）。

特別の教科「道徳」の開始に際しては、賛否両論の幅広い意見があがった。さまざまな調査結果を概観すると、児童生徒の保護者では道徳の教科化を歓迎する意見が多く、小学校および中学校教員では歓迎しない意見が多く、保育者と教育学部生は歓迎する意見がやや多いようだ。公立の小学校もしくは中学校へ子どもを通学させている9079名の保護者（有効回答者数は7400名）に対して道徳の教科化に対する賛否を尋ねた調査によれば、肯定的な態度を表明した者は73.0%であり、否定的な態度を表明した者は13.0%だった（ベネッセ教育総合研究所，2018）。その一方で、道徳の教科化に対する賛否を学校教員に尋ねた調査では正反対の結果が報告されている。道徳の教科化に対して「賛成」もしくは「どちらかといえば賛成」と回答した者は小学校教員で18.8%，中学校教員で21.3%，高校教員で38.8%，「反対」もしくは「どちらかといえば反対」と回答した者は小学校教員で78.9%，中学校教員で75.9%，高校教員で56.3%だった（HATOプロジェクト，2016）。また、同様の賛否を学生と保育者に尋ねた調査では、170名の教育学部生の43%が道徳の教科化に肯定的な態度を、28%が否定的な態度を示しており、29名の保育者の55%が肯定的な態度を、20%が否定的な態度を示していた（越中，2016）。

このような道徳の教科化に対する賛否を分ける要因は何だろうか。越中（2012a，2012b）はGraham, Haidt, & Rimm-Kaufman（2008）が提唱した道徳教育の二分法論を引き合いに出し、発達のアプローチ（e.g., Moral reasoning education）と伝統的アプローチ（e.g., Character education）の対立という観点から説明可能であり、その背景には権威主義と自由主義といったイデオロギーの対立があると指摘している。文部科学省（2015）のパブリックコメント結果の概要を参照すると、道徳の教科化を賛成する者の理由づけには「伝統に基づく価値観・社会秩序の維持」「社会情勢や教育問題への対応」「学校教育の質の向上」が特徴的に挙げられており、反対する者の理由づけには「価値観の押しつけ・画一化による弊害への危惧」が特徴的に挙げられている。したがって、伝統に基づく価値観や社会秩序の維持を志向する賛成者の見解には権威主義・伝統主義が根底にあり、価値観の押し付けや画一化を危惧する反対者の見解には自由主義が根底にあると考えられる。

しかしながら、現時点で権威主義と道徳の教科化への賛否の関係を支持する実証的証拠はない。先行研究結果を概観すると、権威主義的伝統主義が必ずしも道徳の教科化の賛否を説明するわけではないようだ。確かに、権威主義的伝統主義得点の高い者は、子どもの道徳（規範意識）を育む上で大人による指導を重視する道徳指導観の得点も高く（越中，2012b）、国家による道徳教育の管理・均質化を肯定する傾向にあることから（越中・目久田，2017）、強い立場にある者が弱い立場にある者の利益のために、本人の意に反した行動への介入を許容する（Pantić & Wubbels, 2012）といった、管理的な道徳教育観を有する傾向にあるといえる。その一方で、権威主義的伝統主義は道徳の教科化に対する態度と十分な相関関係を示さないことも報告されている（越中・目久田，2017）。

それでは、権威主義的伝統主義は道德の教科化に対する賛否とは無関係なのだろうか。本研究が注目したい点は、先行研究において道德教育均質化志向が権威主義的伝統主義 ($r = .44$; 95% IC = .30-.55)、道德の教科化に対する態度 ($r = .41$; 95% IC = .27-.54) とそれぞれ中程度の相関を有していることである(越中・目久田, 2017)。これらの3変数をKatz (1960) の態度モデルを参考にすると、「権威主義的伝統主義(パーソナリティ) → 道德教育均質化志向(価値観) → 道德の教科化に対する態度(態度)」と整理することができる。すなわち、権威主義的伝統主義は、直接的に道德の教科化に対する態度を説明するのではなく、道德教育均質化志向を媒介して間接的に道德の教科化に対する態度に貢献する要因であると推測される。

以上の議論を踏まえて、本研究は、権威主義的伝統主義が道德教育均質化志向を媒介して道德の教科化に対する態度を説明する、という仮説モデルの妥当性について検証する。なお、本研究は小学校・中学校の教員、および学校教育を専攻する教育学部生を対象にしてこのモデルを検討する。これらの者は、教科としての道德を扱う者たち、もしくは将来的に扱うことになる者たちであり、道德の教科化に対して特に関心が強く、教科化によるメリットとデメリットについて一般的な人々よりも見識があると思われたからである。

方 法

参加者

東北地方のX県において、小学校もしくは中学校に勤務する教員157名(男性69名、女性84名、不明4名; 平均年齢43.39歳)と大学の教員養成課程に在学する学生152名(男性72名、女性80名; 平均年齢20.86歳)を対象に調査を実施した。教員の平均教職経験年数は19.21年(1~42年)だった。

調査は2016年7月から2017年1月の間に実施された。教員に対する調査は2016年度の教員向けの講習・研修の際に実施され、学生に対する調査は大学の授業時間の一部を使用して実施された。なお、調査の実施に先駆けて、当該調査への回答は任意であり、回答を拒否しても一切の不利益を被らないことが口頭で説明された。

調査内容

調査用紙は以下に示す1) から3) の質問内容から構成された。

1) 道德教育均質化志向尺度 越中・目久田(2017)によって開発された尺度であり、“国から学校へ、学校から家庭へと道德教育を均質化することへの志向性を測定する”(越中・目久田, 2017, p. 262)と考えられている。全5項目の一因子構造の尺度であり、一定の信頼性と妥当性が確認されている。調査では5項目の各文章について自分自身の考え方にどの程度あてはまるかを尋ね、「5 とてもあてはまる」から「1 全くあてはまらない」までの5段階で回答を求めた。なお、参加者ごとに各項目の得点を単純加算して道德教育均質化志向得点とした。

2) 権威主義的伝統主義尺度 敷島・安藤・山形他(2008)によって開発された尺度であり、“伝統的権威を中心とした権威のあるひと、ものへの服従の態度と逸脱者への攻撃の態度”(吉川, 1998, p.65)を測定すると考えられている。全5項目の一因子構造の尺度であり、調査では各項目の文章について自分自身の考え方にどの程度あてはまるかを尋ね、「6 とてもよくあてはまる」から「1 全くあてはまらない」までの6段階で回答を求めた。なお、参加者ごとに各項目の得点を単純加算して権威主義的伝統主義得点とした。

3) 道徳の教科化への態度 道徳の教科化に対する態度を測定するために、「道徳を教科化すること」「道徳に検定教科書を導入すること」そして「道徳で評価を行うこと」の3項目を呈示して各々に対する参加者自身の態度を尋ねた。各項目について好ましいと思う程度を「5非常に好ましい」「4好ましい」「3どちらともいえない」「2好ましくない」そして「1非常に好ましくない」の5段階で評定させた。なお、これらの3項目の得点を単純加算して道徳の教科化に対する態度得点 ($\alpha = .70$) とし、高い得点ほど道徳の教科化に対して肯定的な態度を示す指標として扱った。

結 果

基本的統計量と権威主義的伝統主義、道徳教育均質化志向、道徳の教科化に対する態度の関係

はじめに、各指標について属性と性別による違いを検討すべく、各指標の得点を従属変数とする 2 (属性：教員、学生) \times 2 (性別：男性、女性) の 2 要因分散分析を行った (いずれも参加者間要因)。平均値と標準偏差、および分散分析の結果を Table 1 に示した。

その結果、権威主義的伝統主義、道徳教育均質化志向、そして評価の導入の3つの指標において属性の主効果が有意だった (順に $F_{(1, 301)} = 43.67, p < .01, p \eta^2 = .12$; $F_{(1, 301)} = 13.78, p < .01, p \eta^2 = .04$; $F_{(1, 301)} = 13.86, p < .01, p \eta^2 = .04$)。Ryan 法による多重比較の結果は、これらの指標においては教員群のほうが学生群よりも有意に高いことを示した。なお、いずれの指標においても性別の主効果、および属性と性別の交互作用は有意ではなかった。

次に、権威主義的伝統主義、道徳教育均質化志向、そして道徳の教科化に対する態度の関係について検討すべ

Table 1 基本的統計量、および各変数の得点における教員と学生の差異

属性 性別	教員		学生		F 値 (分散分析結果)		
	男性 ($n = 69$)	女性 ($n = 84$)	男性 ($n = 72$)	女性 ($n = 80$)	属性	性別	交互作用
					(df = 1, 301)		
権威主義的伝統主義	14.75 (3.39)	14.30 (3.48)	12.50 (3.85)	13.56 (3.19)	13.78 **	0.57	3.56 †
道徳教育均質化志向	15.99 (3.80)	15.79 (2.75)	12.82 (3.44)	13.93 (3.20)	43.67 **	1.42	2.95 †
道徳を教科化すること	2.73 (0.95)	2.74 (0.76)	2.83 (0.93)	2.89 (0.81)	1.70	0.12	0.04
道徳に検定教科書を導入すること	2.99 (1.11)	2.94 (0.71)	2.90 (0.87)	2.80 (0.70)	1.29	0.56	0.09
道徳に評価を導入すること	2.41 (0.98)	2.14 (0.74)	1.90 (0.69)	1.98 (0.69)	13.86 **	1.12	3.46 †

(注) † $p < .10$, ** $p < .01$ 。

Table 2 権威主義的伝統主義, 道德教育均質化志向, 道德の教科化に対する態度の相関係数

	全体 (<i>n</i> = 309)	教員 (<i>n</i> = 157)	学生 (<i>n</i> = 152)
権威主義的伝統主義 — 道德教育均質化志向	.38 **	.40 **	.26 **
権威主義的伝統主義 — 道德の教科化に対する態度	.19 **	.18 *	.17 *
道德教育均質化志向 — 道德の教科化に対する態度	.37 **	.50 **	.23 **

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$ 。

く, これらの3変数間の相関係数を算出した (Table 2)。教員群と学生群の両群ともに, すべての変数間で有意な相関係数が認められた。

権威主義的伝統主義と道德の教科化に対する態度の関係における道德教育均質化志向による媒介効果

権威主義的伝統主義が道德教育均質化志向を媒介して道德の教科化に対する態度に影響することを示すべく, 清水によって開発された HAD16.050 を用いて Bootstrap 法 (標本の復元抽出を 2000 回に設定) による間接効果の検定を行った (Table 3)。その結果, 参加者全体, 教員, そして学生の各々において, 権威主義的伝統主義を説明変数, 道德の教科化に対する態度を基準変数とする単回帰分析における有意性は消滅し, 権威主義的伝統主義から道德教育均質化志向へ有意な標準偏回帰係数 (順に, $\beta = .38$, $\beta = .40$, $\beta = .26$), そして道德教育均質化志向から道德の教科化に対する態度へ有意かつ中程度の標準偏回帰係数 (順に, $\beta = .35$, $\beta = .50$, $\beta = .20$) が認められた (Acock, 2014)。

参加者全体および教員のみにおける媒介分析では, それぞれ順に $Z = 3.74$ (95%CI [0.04, 0.12]), $Z = 3.48$ (95%CI [0.04, 0.21]) といった有意な間接効果が算出されたが, 学生のみ分析においては有意な間接効果は認められなかった。しかしながら, 学生のみ分析においても, $Z = 1.39$ (95%CI [0.00, 0.06]) という値が得られ, 信頼性区間において土を跨いだ値が含まれなかったことから, 一定の間接効果が認められたと判断した。

Table 3 権威主義的伝統主義と道德の教科化に対する態度の関係性における道德教育均質化志向の媒介効果

分析対象者	単回帰分析	媒介分析				
	A→B	A→B	A→C	C→B	間接効果 (Z 値; bootstrap法)	
全体 (<i>n</i> = 309)	.38 **	.05	.38 **	.35 **	3.74 **	95%CI [0.04, 0.12]
教員 (<i>n</i> = 157)	.37 **	-.02	.40 **	.50 **	3.48 **	95%CI [0.07, 0.21]
学生 (<i>n</i> = 152)	.19 **	.12	.26 **	.20 *	1.39	95%CI [0.00, 0.06]

(注) ** $p < .01$, * $p < .05$ 。表中のAは権威主義的伝統主義, Bは道德の教科化に対する態度, Cは道德教育均質化志向を指し示す。表中の数値は, 特に断りの無い場合には, 標準偏回帰係数を示している。

考 察

本研究の目的は、越中（2012a, 2012b）が指摘する、権威主義的伝統主義と道徳の教科化に対する態度の関連性を実証的に示すことだった。先行研究（越中・目久田, 2017 ; Katz, 1960）に基づき、権威主義的伝統主義は、道徳教育均質化志向を媒介して道徳の教科化に対する態度に影響する、という仮説モデルを立て、その正誤を検証した。媒介分析の結果、仮説モデルどおり、権威主義的伝統主義と道徳の教科化に対する態度との間の関連性における、道徳教育均質化志向の媒介効果が確認された。論理的には関連性があると考えられるものの、これまでの研究では権威主義的伝統主義と道徳の教科化に対する態度との関連性は実証されていなかった。本研究は、道徳教育均質化志向を介在させることで、論理的に導かれるこれら2つの変数のつながりを示した。

権威主義的伝統主義と道徳の教科化に対する態度との関連性は、何を予測するだろうか。現段階では、小学校および中学校教員の間で道徳教育の教科化に肯定的な態度を表明する者は、否定的な態度を表明する者に比べて少ない傾向にあるが（HATO プロジェクト, 2016）、教員を取り巻く今後の状況によっては肯定的な態度の者が増加することが予測される。若者のナルシズムと権威主義の構築過程についてアイデンティティ発達の観点から論じた栗原（1989）によれば、“成人では、すでに内面化した権威が崩れ落ちようとするとき、この権威を改めて主張するか他の権威に依存しようとするために権威主義が生まれる”（p. 79）。また、学校教育の現場においては、教員は「つながる教員」と「しつける教員」といった異なる役割が同時に求められ、常に「異化」「調整」「再定義」といった方略を駆使して自らの教職アイデンティティを維持しようと努めている（中村, 2015）。その一方で、学校教員の急速な世代交代によって経験年数の浅い教員の割合が増加することで人材育成上の問題が危惧されている（臼井, 2016）。教職者としてのアイデンティティの葛藤に特に揺らぐと思われる若い世代の教員たちにおいて、そのような揺らぎを支え、適切なアイデンティティの構築を導くための育成機能が働かないことにより、栗原（1989）が指摘するように、彼らはその揺らぎを支えるべく権威主義に自らのアイデンティティを委ねる可能性は十分に考えられる。その結果として、本研究が導いた「権威主義的伝統主義→道徳教育均質化志向→道徳の教科化に対する肯定的な態度」という筋道をたどり、教科化された道徳教育に対する肯定的な態度が形成されるかもしれない。

また、権威主義的伝統主義とは別に、教育現場を取り巻く状況もまた、今後学校教員たちの間で道徳教育の教科化を歓迎する声を後押しするかもしれない。浜谷（2012）は、昨今の経営主義的な教職員への管理が強化される一方の学校教育に対して次のように警鐘を鳴らしている。すなわち、“自己の裁量が奪われ、教職員集団で協同して長期的な視野で実践を構築することを阻害されるようになれば、手っとり早く、何か「正しいやり方」を求めるようになる。簡便な行動レベルやハウツーレベルのマニュアルに頼らざるを得なくなる”（浜谷, 2012, p. 21）。横浜市教育委員会（2018）の調査結果には、小中学校教員の多くが校内運営として割り当てられた業務に多くの時間を費やさざるをえず、教材研究に充てる時間が不足している状況が示されている。そのような状況下において、手っとり早く「正しいやり方」というコンセンサスを得やすい、均質化され標準化された特別の教科「道徳」に対する肯定的な態度が増加していくことは至極当然のことだろう。実際に、道徳の教科化に対して肯定的な小学校教員の中に“（教科化によって）文科省から価値項目についての指導要領が出れば指導する側も資料にふりまわされることなく楽になるのではないだろうか”（越中・目久田, 2016, p. 171）といった意見がある。

このように考えると、本研究は権威主義的伝統主義のみに焦点を当てたが、本研究が扱った権威主義的伝統主義と道徳教育均質化志向の2変数だけで道徳の教科化に対する態度を説明することは不十分であることが分かる。教員の物理的・心理的な業務負担量をはじめ、仕事に対する自己効力感や自己統制感、認知する責任の重さ、認知する職場内におけるサポート量、といった要因もまた道徳の教科化に対する態度に関連していると推測される。もちろん、本研究においてはこの考えもまた推測の域を出ない現状にあるが、今後の研究では、権威主義的伝統主義的パーソナリティを構築するに至る背景をはじめ、さらなる関連要因の探求が望まれる。

引用文献

- Acock, A. C. (2014). *A Gentle Introduction to Stata* (4th ed.). Texas: Stata Press.
- ベネッセ教育総合研究所 (2018). 学校教育に対する保護者の意識調査 2018 (ダイジェスト版) ベネッセ教育総合研究所.
- 越中康治 (2012a). 道徳性の発達 深田博己 (監修) 湯澤正通・杉村伸一郎・前田健一 (編) 心理学研究の新世紀3教育・発達心理学 ミネルヴァ書房 pp. 222-237.
- 越中康治 (2012b). 教育学部生の道徳教育観と権威主義的伝統主義との関連 宮城教育大学紀要, 47, 307-313.
- 越中康治 (2016). 道徳の教科化に対する教師・保育者及び学生の認識 (1) 宮城教育大学紀要, 51, 159-165.
- 越中康治・目久田純一 (2016). 道徳の教科化に対する教師・保育者及び学生の認識 (2) ——テキストマイニングを用いた分析—— 宮城教育大学紀要, 51, 167-176.
- 越中康治・目久田純一 (2017). 道徳教育均質化志向尺度作成の試み 宮城教育大学紀要, 52, 261-264.
- Graham, J., Haidt, J., & Rimm-Kaufman, S. E. (2008). Ideology and intuition in moral education. *European Journal of Developmental Science*, 2, 269-286.
- 浜谷直人 (2012). 特別支援教育における心理学の専門性と教育実践の関係——その危機に関する考察—— 心理科学, 33 (2), 13-22.
- HATO プロジェクト (2016). 教員の仕事と意識に関する調査 国立大学法人愛知教育大学・ベネッセ教育総合研究所.
- 林 泰成 (2015). 道徳の教科化とその教育学的背景 学校教育研究, 30, pp. 38-49.
- Katz, D. (1960). The functional approach to the study of attitudes. *Public Opinion Quarterly*, 24, 163-204.
- 吉川 徹 (1998). 階層・教育と社会意識の形成——社会意識論の磁界—— ミネルヴァ書房
- 栗原 孝 (1989). 現代日本の若者のナルシズムにおける権威主義 経済学紀要 (亜細亜大学), 14, pp. 65-84.
- 文部科学省 (2015). 学校教育法施行規則の一部を改正する省令案等に関するパブリックコメントの結果 (概要) (2018年11月) Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2015/03/27/1356313_8.pdf
- 文部科学省 (2016). 道徳教育について——考える道徳への転換に向けたワーキンググループ資料4—— (2018年11月) Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/078/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/08/05/1375323_4_1.pdf

- 中村瑛仁 (2015). 教員集団内における教職アイデンティティの確保戦略——アイデンティティ・ワークの視点から—— 教育社会学研究, 96, 263-282.
- Pantić, N., & Wubbels, T. (2012). Teachers' moral values and their interpersonal relationships with students and cultural competence. *Teaching and Teacher Education*, 28, 451-460.
- 敷島千鶴・安藤寿康・山形伸二・尾崎幸謙・高橋雄介・野中浩一 (2008). 権威主義的伝統主義の家族内伝達——遺伝か文化伝達か—— 理論と方法, 23, 105-126.
- 清水裕士 (統計分析ソフト HAD16.050) Sunny side up! (<http://norimune.net/had>)
- 臼井智美 (2016). 学校組織の現状と人材育成の課題 日本教育経営学会紀要, 58, 2-12
- 横浜市教育委員会 (2018). 教員の「働き方」や「意識」に関する質問紙調査の結果から (2018 年 11 月) Retrieved from http://www.edu.city.yokohama.jp/tr/ky/k-center/nakahara-lab/txt/180514_hatarakikata.pdf

付 記

本研究は JSPS 科学研究費補助 15K17263 の助成を受けて実施された。また、本研究は日本パーソナリティ心理学会第 27 回大会 (於 茨木市) において発表した一連の内容に加筆修正を施したものである (発表題目 1: 道徳教育均質化志向と権威主義及び道徳の教科化への態度との関連 (1) ——小・中学校教員と教育学部生を対象とした比較検討——, 発表題目 2: 道徳教育均質化志向と権威主義及び道徳の教科化への態度との関連 (2) ——権威主義と道徳の教科化への態度の関係性に及ぼす均質化志向の媒介効果——)。